もし潮田渚が色々チートだったらどうなるか

紗也

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ほぼ、タイトルに書いてある通りです。

潮田渚はいろんな意味で天才児だ。しかし、何故か彼は自分が天才児である事をひた隠しにしていた。

そんな彼が織りなす物語をどうぞご覧あれ。

渚とあかり（カエデ）は義姉妹で血は繋がってない。

渚とあかり（カエデ）は殺し屋。

渚の父親はあぐりと再婚。

なるべく更新していく予定です。文の構成とか、おかしな所が多いと思います。

それがダメと言う人は、ブラウザバックしてください。

目次

キャラ設定 ―― 1
1話　プロローグ ―― 6
2話　この人（？）って本当に教師か？ ―― 10
3話　先生、ド怒りの時間 ―― 13
4話　日常の時間 ―― 18
5話　ハンディキャップの時間 ―― 22
6話　素行不良生の時間 ―― 27
7話　素行不良生の時間　part2 ―― 31
8話　ハニトラの達人の時間 ―― 36
9話　毒薬の時間 ―― 39
10話　全校集会の時間 ―― 44
11話　中間テストの時間 ―― 49
12話　テスト返しの時間 ―― 55
13話　修学旅行迄の時間 ―― 58
14話　修学旅行の1日目 ―― 61

キャラ設定

潮田渚（現：雪村渚、芸名：塩野秋）　女の子

４歳から感情の起伏が読み取れる。

年中（５歳）の頃に両親が離婚。父親の方について行った。

離婚の理由：渚が、男の子じゃないから。

そして、小さい頃の記憶を鮮明に覚えているから。

その事などの所為で人間不信になり、家族と数人にしか心を開いていない。

６歳から暗殺業をしている。

コードネームは『ナギ』。

仕事中以外でもナイフは持っている。

頭脳の方はＩＱ２００位あり、運動神経も抜群！

大抵の事は人並み以上にこなせるが、特に、楽器演奏（特にピアノ、ギター、バイオリン）が得意。

中性的な顔立ちなので、普段は男装している（演技力を鍛える為にも）。

暗殺の時も大体が男装して殺る。

髪の毛はウィッグで、本当は腰ぐらいまである黒髪。（暗殺や変装用のいろんな色や髪型のウィッグと伊達メガネを持っている。）

だが、何時もは勉強はダメで、運動神経があまり無いという様な原作に忠実な性格を演じている。

両親が離婚してから父親があぐりと再婚し、あかりと義姉妹になった。あかりのことは、姉妹として好き。

元子役『塩野秋』で、磨瀬榛名こと雪村あかりと共に『２大天才子役』と呼ばれていた。

浅野学秀は、幼馴染で好きな人。

普段は、『しゅう』と呼ぶが、学校では、『浅野くん』と呼ぶ。

烏間先生は、格闘技術を教えてくれる先生。学校でも『烏間先生』と呼ぶ。

家で話す時は大抵『・・・』が最初に付く。
渚の父親現：雪村秋斗　（元潮田秋斗）
元暗殺者で、渚が生まれ足を洗う。
渚に暗殺の才能があると分かると、手取り足取り自分の持っているスキルを渚に教える。今は、防衛省で働いていて、烏間の上司。
裏では、渚たちのサポートをしている。
離婚してスグにあぐり達を引き取る。
娘達をすごく愛している。⇦親バカ。
浅野学峯とは、結構仲がいい。
あぐりとは、幼馴染で元々恋愛的に好きだった。

茅野カエデ　（本名：雪村あかり　　芸名：磨瀬榛名）
元子役『磨瀬榛名』で、塩野秋こと潮田渚と共に『2大天才子役』と呼ばれていた。
母である「雪村あぐり」が、渚の父親と結婚して渚と義姉妹になる。
渚の事は、姉妹として好き。
渚の父親に、暗殺のスキルを教えてもらっている。コードネームは「レッド」。
初めて人を殺したのは、6歳の時。
カルマ並みに、頭は良い。運動神経は暗殺業をしている為か、凄くいい。
だが、何時もは勉強はE組の中ではまずまずで、運動はあまり得意じゃないという演技をしている。
浅野学秀とは、幼馴染。
普段は『学秀くん』と呼び、学校では『浅野くん』と呼ぶ。
烏間先生に、格闘技術を教えてもらっていて、学校でも『烏間先生』と呼んでいる。

浅野学秀
カエデと渚の幼馴染で、渚の事が異性として好き。
学年首席で、椚ヶ丘学園理事長の息子。

幼なじみの前や、家だとキャラが全然違う。
今の悩み・テストで渚とカエデが本気を出してくれない事（勝負にならない
学校で他人行儀で話される事。
渚のお陰で、原作よりも少しだけ頭が良い。偶に、渚たちの仕事を手伝っているので、暗殺技術は高い。コードネームは『シュウ』
学校では、渚やカエデと親しくしないようにしながらも、Ａ組に入れる方法を探している。
ＩＱ　１８０ぐらい　（独自解釈です。）

浅野學峯（あさのがくほう）
渚たちの父親の雪村秋斗と仲が良い。渚の事を特に気に入っている。理由は、
・難関大学の入試問題を難なく解いたから。
・礼儀正しいから。
・チェスでタメを張れるぐらい強かったから。
カエデの事も渚ほどではないが気に入っている。
渚とカエデが殺し屋なのは知っているし、学秀が偶にそれを手伝っているのも知っている。秋斗が元殺し屋なのも勿論知っている。渚以上のチート。
偶に、渚たちに格闘技を教えている。
渚と、あかりのことは、『さん』付で呼ぶ。
殺せんせー
月を破壊した犯人。来年には、地球も壊すと言った化物（モンスター）。元殺し屋で、その時のコードネームは「死神」（コレはまだ誰にも言ってない。）

烏間惟臣（からすまただおみ）
翌年３月に地球を爆破させると予告して椚ヶ丘中学校３年Ｅ組の教師となった謎の生命体殺せんせーを監視する防衛省臨時特務部所属の男性である。

自らも教員免許を持っており、3年E組の副担任となった。担当科目は体育で、授業ではナイフや銃の扱いかたを教え、生徒たちの暗殺活動に役立てている。
仏頂面で常に厳しい表情をしているが、整った容姿をしているため女生徒からは「カッコいい」と評されている。
殺せんせーの暗殺の任務が最優先ながらも、生徒たちにはなるべく普通の学生生活を送ってもらいたいと考えており、国からの命令とE組の環境との板挟みになることもある。新しく英語の教師となったイリーナ・イエラビッチの奔放な態度に頭が痛いばかりの苦労性である。
犬好きであるが、犬の前を通ると死にもの狂いで吠えられる。
渚の父親こと雪村秋斗の部下。渚とあかりのことは、秋斗がよく話すので知っている。よく渚とあかりに格闘技術を教えている。渚たちが殺し屋だと言うことは知っている。
渚、あかりのことは呼び捨てで呼ぶ。
イリーナ・イエラビッチ
殺せんせーを殺しに来た殺し屋。渚とあかりのことは、暗殺の時に会った事がある。ハニートラップを使う殺し屋の中では1位の実力者。後は、原作どうり。

E組
大体原作どうり

『暗殺の時』
潮田渚
コードネームは《ナギ》。
ハニートラップも得意で、ビッチ先生とタメを張るぐらい。1番得意なのは中遠距離暗殺。
武器は、ナイフ2本（あまり使わない）と、拳銃が2丁（S＆amp・W　M36とS＆amp・W　M10）、スナイパーライフル（PGM　ヘカートII）、ワイヤー、毒(自家製)スタンガンなど色々持っ

ている。暗殺時は、黒のパーカーでフードを深く被っていて、紺色の長ズボンを履いている。メガネは外していて、緑色のカラコンに赤色ポニーテールのウィッグをつけている。

ハニトラの時の服装と名前

名前は、雪雫（せつな）。

ターゲットのタイプによって服装や髪型を変えるが、大体は原作の渚君が女装した時の服装に茶色ロングヘアのウィッグをつけている。

茅野カエデ

コードネームは《レッド》。

ハニートラップは、人並みにはできるがあまり得意ではない。１番得意なのは、近接暗殺。

武器は、ナイフ７本と、拳銃（Ｓ＆ａｍｐ．Ｗ　Ｍ１０）とワイヤー、毒（渚が作った）、スタンガンなどいろいろ持っている。

服装は、渚と同じ。

浅野学秀

コードネームは《シュウ》。

武器は、ナイフ５本と、拳銃（ナガンＭ１８９５）とスナイパーライフル（ＦＲ―Ｆ２）、ピアノ線、スタンガン、などいろいろ持っている。

1話　プロローグ

渚ｓｉｄｅ

「潮田渚、職員室に来い。」

～職員室～

「お前は、Ｅ組に移行される事になった。お前の所為で、俺の評価まで下がっちまったじゃねーか。」

やっとこの時が来た。僕は必死に笑いを堪える。

「わかりました。先生、楽しかったですよ。ずっと騙され続けてくれてありがとうございます。」

「な、なんだと。」（俺を騙していた、だ、と⁉？）

～教室で～

〝Ｅ組への移行をおしらせします。〟

そう書かれた通知書をテストの結果の代わりに渡された。

まぁ、そうなると確信してたよ。Ｅ組に堕ちるなんてさ。まぁ、教師もクラスメイトも、　　よく気づかなかったと思うよ。僕がＥ組に堕ちる様に演技してたという事を。

もう周りにはこの事は広がったか。これのおかげで、僕らも今以上には自由に動けるようになるかなぁ？

クラスメイト曰く

「死んでも、Ｅ組に堕ちたくない」

「Ｅ組に堕ちるぐらいなら死んだ方がマシ」

らしい。

死んだ方がマシなら、死ねばいいのに。俺よりもお前らの方がバカなのにさ。

僕たちが通う偏差値６６の難関名門中学、椚ヶ丘中学校は、Ａ～Ｄ迄のクラスが本校舎にある。

だが本校舎から離れた森の中に、１つの古びた校舎がある。その校舎にあるクラスの事を本校舎の奴らは＿＿＿＿＿＿＿＿ｅｎｄのＥ組と呼ぶ。

素行が悪い生徒、

勉強に付いていけなくなった生徒などが担任によって容赦なく押し込まれる。
それに、A～D組の生徒から後ろ指を指され、罵倒暴言されながら学校生活を送らなければならない。
元のクラスに戻るには、とても良い成績を取らなければならない。
というような、絶望感溢れるクラスだ。
なら何故、僕がそんな絶望感溢れるクラスに行こうとしているのか疑問に思う人もいるだろう。
それには3つの理由がある。
1つ目は、あぐり姉が居るからだ。←シスコンじゃないから。この人だけはキチンと自分を見てくれるからだよ。って誰に説明してるんだろ？
2つ目は、このクラスには、自分の事をキチンと見てくれる人が居ないから。
3つ目は、A組にだけは行きたくないから。

＊

～渚たちの家で～
渚「・・・ただいま。」
あぐり）E組になったんだろうなぁ
あぐり「お帰りなさい。結果はどうだった？」
渚「・・・E組に堕とされた。」
あぐり「だと思った。まぁ、これからは学校でもよろしくね、渚。」
そういえばあぐり姉さん、E組の教師になったんだっけ？
渚「うん、よろしくね、あぐり姉。」
渚「・・・あかりとお父さんは？」
あぐり「あかりは仕事だよ。もう少ししたら、帰ってくると思う。お父さんは、夜勤だって。」
あかりの仕事というのは、女優だ。僕とあかりは、小さい頃子役を

していた。そういえば、天才子役って言われてたなぁ。今は、ウィッグをつけてバレないようになった。
僕は学校の校則で『アルバイト禁止』ってなっているので、今は休業中。あかりはアルバイトＯＫの学校に行ったので、女優業を続けている。
あかり「ただいま～」
あかりが帰ってきた。
渚・あぐり「（・・・）お帰り～」
あぐり「あかりも帰って来たし、ご飯食べよっか。」
僕たちがご飯を食べている時に、あかりが唐突に言い出した。
あかり「私、椚ヶ丘に行く。」
渚「・・・わかった。…って、えっ！今なんて？」
急にあかりが変な事を言いだしたぞ。
あかり「だ・か・ら・椚ヶ丘中学校に編入するの。」
なんで、よりにもよってうちの学校？
渚「・・・なんで？」
あかり「だって、お姉ちゃんと渚は同じ学校じゃん。私だけ仲間はずれなのは、イヤ。」
あぁ～、ヤキモチね。
渚「・・・確かに、仲間はずれ。けど、女優業はどうするの？うちの学校、『バイト禁止』」
あかり「ん～。学業を優先させるって理由で休業する。」
そう来たか。
あぐり「いいんじゃない？」
あかり「ほんと～？」
あぐり「うん。」
あかり「やった～。」
だが、この平穏な日々は長くは続かなかった。
この数日後、あぐり姉さんは、とある研究所の爆破に巻き込まれて死んだ。
そして、僕たちは、あぐり姉を殺した犯人と研究所にいたあぐり姉

元婚約者に復讐する事を決意した。

2話　　この人（？）って本当に教師か？

渚ｓｉｄｅ

僕たちは、いつも通り朝のニュースを見ていた。そのニュースの女性キャスターが、

【突然ですが、臨時ニュースです。　つい先程、月が7割型消滅したとの情報が入りました。】

これを見て、僕たちは犯人が誰なのかわかった。

そう、あぐり姉を殺した奴で、今回のターゲットだ。

そして、僕たちは復讐心を燃やした。

＊

僕たちはその復讐心を演技で隠し、家を出た。

あかり「ねぇ、渚。学校では、他人のフリして過ごさない？」

渚「別にいいよ。転校して直ぐなのに、こんな仲いいのはおかしいしね。」

あかり「そうゆ～事。それと、学校では、雪村あかりじゃなくて、茅野カエデだから。」

渚「わかった。それじゃぁ、先行ってるね。」

あかり「また後でね。」

と言って、僕は先に学校（隔離校舎）に着いた。

校舎に入り、教室へ向かう。

教室は物音1つもしなかったが、殆どの生徒が揃っていた。

誰が誰かなんて僕は興味なかった。

だが皆1つだけ共通点があった。

それは、

皆が暗く、絶望した表情で俯いて机の上だけを見つめているという事だ。

多分、この隔離校舎、この教室、この席に座った瞬間、いや、移行通知をもらった時から自分は落ちこぼれなんだと実感しているのだろう。

まぁ、僕やあかりはそんな事はないけどね。だが、僕らもそういう演技をする。

＊

廊下から『クニャグニャ』という変な音と『コツコツ』と複数の革靴の音が響いてくる。

ガラガラ

「はじめまして。私が月をやった犯人です。」

渚・茅以外「「「……はっ？」」」　　渚・茅【やっときたね、この人殺し（ターゲット）。】

僕ら以外は目が点になっていた。

「来年には地球もやる予定です。君たちの担任になったので、どうぞヨロシク」

渚・茅以外（（（（（……まず5、6箇所突っ込ませろ!!!））））↑ズーン、と教室の空気が沈んだ。

それ以降、黄色い触手は喋らずに、触手を動かしていた。そして、黄色い触手の代わりに（と言ってはなんだが）となりにいた男の人（僕の師匠）が話し始めた。

「…あー、防衛省の烏間という者だ。まず此処からの話は国家機密だという事をキチンと理解していただきたい。」

渚）これは僕らにあの人殺しを殺してほしいから来たのかな？

烏間「単刀直入にいう――――君たちに、この怪物を殺してほしい」

渚）やった、当たった。このタコに復讐できるし、このタコを殺したことによって僕らの裏での知名度も上がるって訳で、一石二鳥だ。

烏間「詳しい事を言えなくてすまない。だが、コイツの言ったことは真実だ。来年の3月に地球をも破壊する。後、此れは国からの正式

な依頼だ。その為、報酬もキチンと出る」
「ほ、報酬ですか？」
誰かが質問した。
烏間「成功報酬は１００億円、国が全て支払う。」
クラス全員「「「なっ、ひゃ、百億円!!!」」」
烏間「当然だ。この暗殺が成功すれば地球は救われる、それを考えれば妥当な額だろう？」
師匠は『何でそんなに驚く』と言いたげな顔で、そう言った。
まぁ、僕らにとって１００億なんて想像出来るわけがない。
僕のやあかりの最高年収でも２億だったから、その５０倍。僕らでも想像できない。
が、あのタコを殺せるならなんでもやってやる。
そして、学校からのプリントを配るような感じで僕たちにあの触手には効く武器と弾が配られた。
これから、ナイフとか手慣れてないような演技をしなきゃね～
それと、弱点メモでも作りますか。公開する方と僕たちだけの方と。

3話　先生、ド怒りの時間

キーン　コーン　カーン　コーン
チャイムが鳴ったと同時に先生(タコ)が教室に入ってきた。
「起立、気をつけ、れーい」
礼と同時に教室に銃声が響き渡った。
タコ「撃ったままでいいので出席をとります。磯貝くん……」
出席を取り終わると先生(タコ)は
「今日も命中弾は0でしたね～。殺せるといいですね～、卒業までに。ヌルフフフフフ」
と僕たちを煽る様に言ってきた
1限目　～4限目　今迄の復習とクラス内の実力判断テスト
～国語～
タコ「一年生の復習です。『こうけん』を渚くん、『じょうちょ』を磯貝くん、『こくもつ』を茅野さん、『ゆいいつ』を奥田さんが、それぞれの漢字を書いてください。」

タコ）さっきからタコってなんですか?タコって?私はタコではありませんよ!?せめて、先生にしてください。
作者）仕方ないですね～先生と表記することにしてあげますか。それと、メタ発言禁止です。
先生）わかりました。仕方なくって、先生傷つきます。それに、なぜ上から目線何ですか?
作者）何となくです。それと、本編から外れてごめんなさい。それでは、どうぞ。

渚【貢献】　磯貝【情緒】　茅野【殻物】
奥田【隹一】
先生「渚くん、磯貝くんは合っています。」

先生はそう言って、顔を明るい朱色にした。
先生「茅野さん、『こくもつ』の『こく』は、『殻』ではなく、『穀』です。奥田さん、『ゆいいつ』の『ゆい』は、『隹』ではなく、『唯』です。２人とも、惜しかったですね～。」
そう言って、次は顔を暗い紫色にした。
先生の皮膚ってどうなっているのか、興味あるなぁ～。
残りの時間は、クラス内の実力判断テストを受けた。
～数学～
先生「２年生の数学の復習です。【３ｘ＋２＋４ｘ－３】を千葉くん、【（３ｘ＋４ｙ＋１）＋（２ｘ－ｙ＋４）】を速水さんが解いてください。」
千葉【７ｘ－１】　　速水【５ｘ＋３ｙ＋５】
先生「２人とも正解です。速水さん、引っかかりませんでしたね～。」
そう言って、顔を明るい朱色をした。
・　・　・　・
というように、１限目から４限目までは主要５教科の復習とクラス内の実力判断テストをした。

＊

～昼休み～
寺坂くんに呼ばれて、僕は校舎裏に来ている。
いつも通り、寺坂くんの両脇には村松くんと吉田くんが居た。
寺坂くんは、何か悪いことを考えている様な笑みをしていた。
寺「機嫌によって顔の色が変わるやつちゃんと調べて来たか？」
何、上から目線でもの言ってるのかなぁ？あぁ～、めんど～。だが、僕はこの感情を表に出さない様にして寺坂くんの問いに答えた。
渚「う、うん。舐めているときの顔は緑のシマシマになるのは知ってるよね？他にも……」

寺「俺は知らなくていいんだよ。」
は？何言ってんの、コイツ。殺ってていいかな？（黒い笑み）お前が聞いたから、律儀に答えてやったんだけど、まぁ、いいや。
寺「作戦がある。あのタコが1番油断してる顔の時に、お前が殺りに行け」
『殺りに行け』か。楽しみだなぁ～。プランは考えてある。
寺「嫌、なんて言わねーよなー。お前も俺らも抜けだすんだよ、この状況から。例え、どんな手を使ってでもな。…しくじんなよ、渚くん。」
そう言って、寺坂くんは、僕に小さな袋を渡して教室に戻っていった。中身を見ると、やはり手榴弾だった。
後は、このプランを成功させるだけだ。

ピューー　ドカーン
後ろを振り返ると、先生が片手（？）にミサイルを持って立っていた。
僕は、ミサイルをどう処分するのか少し気になった。
そんな事を考えていると先生が、
「教室に戻りましょう、渚くん。５時間目を始めますよ。」
と言い、教室に向かっていった。僕も、すぐに先生の背中を追う。

５時間目　　国語の時間
「では、お題に沿って短歌を作ってみましょう。ラスト7文字を『触手なりけり』でしめてください。
周りからざわめきが起きる。そりゃそうだろう。この世のどこに触手について短歌を詠む人が居るんだ。
「書けた人から先生の所に持って来なさい。チェックするのは、文法の正しさと触手を美しく表現できたか」

そういったあとに先生は例文を詠み上げた。それに、出来るまで帰っては行けないといった。こっちにしては、好都合だ。
先生は、教卓の横の椅子に座って薄ピンクの顔をしている。今がチャンスだ。
そう言った後、自分の席から立ち先生のところに行く。持っているのは対先生用ナイフと、寺坂くんから渡された手榴弾。
最初にナイフで襲って、その後抱きつく。というプランを再度確認した。
今回だけは、失敗してもいいか。出来るだけ早く終わらせようっと。
そう思いながら、書き終わった俳句に裏に対先生用ナイフを隠し、先生の前でナイフを取り出しそれをふりかざし、失敗した後に先生に抱きついて手榴弾を外す。勿論、先生にバレないようにね。外したらすぐに先生から離れる。
バーーン
寺「よっしゃー、１００億いただきー。」
茅「ちょっと、渚に何持たせたのよ⁉？」
寺「おもちゃの手榴弾だが、火薬で威力を上げてある。…人間が死ぬような威力じゃねぇよ。それに、１００億で治療費くらい出してやるよ。」
渚「…ゴメンだけど治療費は要らない。」
茅「渚…大丈夫？」
渚「うん、大丈夫だよ。心配かけてごめんね。」
寺「っな、あれだけの威力の手榴弾を受けて無傷だと！ありえねぇ⁉？　」
本当だったら、そうだろうね。けど、私は殺し屋。死なないようにする鍛えてるし、反射神経や、危機察知能力だって高いほうだ。
それに、手榴弾を覆っているのは、
殺「実は先生、月に1度ほど脱皮をします。つまり、月1で使える先生の奥の手です。」
声がする方を見れば、先生は、触手を広げて天井に張り付いていた。

だが、先生の顔色は、真っ黒になっていた。
殺「寺坂、吉田、村松。首謀者は、君たちだな。」
寺「い、いや。渚が勝手に」
ゴトッ、パタッ……
音がした方を見ると、『寺坂』、『吉田』、『村松』と書いてある表札が落ちていた。
殺「政府との契約ですから、先生は決して君たちに危害を加えないが、次また今の方法で暗殺に来たら君たち以外に何をするかわかりませんよ。家族や友人……いや、君たち以外を地球ごと消しますかねぇ。」
５秒間で〝地球の何処に居ても逃げられない〟と。どうしても逃げたければ、この先生を殺すしかないと。
茅「殺せない先生……殺せんせーは？」
と言い、先生の名前は『殺せんせー』となった。
授業とＨＲが終わると、僕は、自分の家の表札があるか確認しに行った。『潮田』も、『雪村』も無かったので、少し安心して家に帰った。

４話　日常の時間

次の日

ｐｉｐｉｐｉ　ｐｉｐｉｐｉ　ｐｉｐｉｐｉ　カチャ

ＡＭ７：００

渚「う、う～ん。」

もう朝か～。学校行かないとな～。それより、あかりを起こしに行かないと。

コンコン　ガチャ　ユサユサ

渚「あかり、起きて～。先にリビングに行ってるからね。」

あか「わかった～。」

テクテクテク

渚「おはよう、お父さん。あかりはもう少ししたら起きてくるよ。」

秋「おはよう、渚。明日の仕事についてだが、今回はちょっと手強い。何だったら、シュウをスケットに入れるが？」

渚「わかった～。あかりと相談してみるよ。」

学秀と一緒に仕事したいな～。

秋「それより、朝ごはん早く食べないと遅刻するぞ。」

あか・渚「は～い。」

あかり、いつの間に居たんだろう？まぁ、良いか。

・

・

・

あか・渚「ごちそうさまでした。」

僕たちは朝ごはんを食べた後、制服に着替えて家を出る。

あか・渚「行ってきまーす。」

・

・

・

学校では、何故か杉野がすごく落ち込んで居た。

なんでも、暗殺に失敗したらしい。まぁ、どうでも良いけど。

そのせいで、授業中の今でも杉野の周辺の空気が重たい。
そんな事を考えていると、殺せんせーが、後ろの方へ視線を向ける。
そして、視線を向けた先に触手を向かわせる。
「!?」
殺「菅谷くん、惜しいですね～。先生はもっとシュッとしたかおですよ。」
そう言って、赤ペンで菅谷くんの書いた落書き（？）を修正したものをみんなに見せる。
「「どこがだよ！」」
・
・
・
殺せんせーはニューヨークに行ってスポーツ観戦をするためにいつもよりも早く帰って行った。
その後すぐ、防衛省の烏間（師匠）さんが来た。
烏間（師匠）さんは、「奴を殺せるような糸口は掴めそうか？」と聞いてきた。
そのしゅんかん、クラスの空気が重くなった。
糸口、か。はっきり言うと、僕はもう少しで掴めそうだ。殺せんせーを観察してれば大体の事は見えてくるからね。だが、周りは違う。皆も先生を暗殺しようと頑張ってはいるものの、今の環境を何処かで楽しく感じている部分がある。
誰もが言葉に詰まっている時に、狭間さんが口を開いた。
狭「ていうか、私たちE組だしー。」
磯「無理ですよ、烏間さん。」
と磯貝が言った後に、周りも「無理だ。」と烏間さんに告げた。
烏「あぁ、そうだな。どんな軍隊でも不可能だ。だが、君たちだけはチャンスがある。」
確かにね。だって、こんな近距離で暗殺できるのは僕たちだけだもんね。
「えっ」
えっ、そこ驚く所!?

「奴は何故か。君たちの教師だけは欠かさないんだ。放っておけば、来年3月に地球は爆破される。削り取られた月を見ればわかるように、その時、人類は1人たりとも助からない。奴を生かしておくには余りにも危険すぎる。この教室が、奴を殺せる唯1つの場所なんだ。」

そうだ、此処はあの超生物（殺せんせー）を殺せる唯一の場所だ。

そして、僕たちには、超生物（殺せんせー）を1番近くで殺せるというチャンスが与えられている。

だが、僕たちも分からないことが多すぎる。

何故、地球を破壊させるのか。何故、僕らの担任をするのか。など理解不能な事が多すぎる。

＊

～次の日～

学校に来たら、杉野が昨日とは裏腹にスッキリしたような顔をしていた。なんでも、殺せんせーに、いいアドバイスをもらったらしい。

そんな事があったが、今日もいつも通り終わっていった。

渚ｓｉｄｅ

皆は僕らが偽りの仮面を外した時、皆はどう思うんだろう？

騙されたと言って、僕らを仲間と思わなくなるだろうか。――それはそれでいいと思う。

すごいと言って、もっと懐かれるのだろうか。――それは嫌だ。今でもウザくて仕方ないのにこれ以上懐かれるとか吐き気してくるわ。

それともいつも通りに接して来るのだろうか。――1番厄介だ

なぁ。それなら、仲間と思われないほうが、楽だわ。
まぁ、元々仲間と思ってないけど。
正体をバラすまで後〇〇日

5話　ハンディキャップの時間

いつもの休み時間。
殺せんせーは裏庭でかき氷を作っていた。
氷は、北極から仕入れて来たらしい。
そこを狙う磯貝くん、前原くん、三村くん、岡野さん、片岡さんは、忍ばせたナイフを確認した後目で合図を送りあった。
「「「「「殺せんせー！俺ら（私たち）にもそのカキ氷、食わせて（食べさせて）くれよ～（よ～）」」」」」
殺せんせーは、生徒たちが心を開いてくれたことを嬉しく思い、涙ぐんでいる。
だが、その瞬間彼らは殺気立って、ナイフを取り出し一斉に飛びかかった。
殺せんせーは、それをわかっていたかの様に派手に風を巻き上げて移動した。
殺「笑顔が少々ワザとらしい。こんな危ないものは置いといて、花でも愛でて、いい笑顔から学んで下さい。」
そして、ナイフを持っていた手には、綺麗なチューリップの花があった。
その花を見た片岡さんは声を荒げて、
片「⊠っていうか、殺せんせー‼？この花クラスの皆で育てた花じゃないですか？？？？？」
花壇を見ると？？？？？そこには無数のクレーターがあり、綺麗に咲いていたはずのチューリップはなくなっていた。
殺せんせーは、案の定、クラスの女子たちから非難を受けていた。
お詫びにとマッハで新しい球根を植えていた。

僕は、『先生は、格好つけるとボロが出る』とメモをした。

茅「渚！どうしたの？」
渚「先生の弱点とか、癖とかを書き留めてたんだ。家に帰ってから

見直そうと思ってね～。」
茅「家で詳しく教えてね。」ボソッ
そんなことを話していると、杉野がメモを取った。
ページを捲っていく程、杉野の顔が苦くなっていく。そりゃそうだろう、コッチには、大まかな事しか書いてないからね。大事な情報をまとめてある方を、クラスメイトであっても簡単に見せるわけないじゃないか。茅野は別だけどね。だって家族だし。

そんなことをしていると、とても嬉しそうな顔をした磯貝くんがこちらに駆け寄ってきた。
磯「殺せんせーが、チューリップのお詫びにハンディキャップ暗殺大会させてくれるんだってさ！おまえらも校舎から武器持ってこいよー。」
そう言って、磯貝くんは走って行ってしまった。杉野は、それを聞いた途端に、校舎の中に、武器を取りに行った。
茅野は、本性を見せない程度に殺ってくる、と行って杉野と一緒に武器を取りに行った。
僕は、殺せんせーを観察するべく、殺せんせーのもとへ向かった。

正直に言おう。木に吊るされていても、殺せんせーのスピードは余り落ちなかった。
下から攻撃されるのを難なく避けていた。
それを詳しく観察するために見ていると、茅野が自家製の槍を持ってコッチに来て、師匠（烏間さん）が後ろにいた。
茅「どう？渚…」
渚「う、うん。皆は完全に舐められてる。…あかり、本気は出したらダメだよ。（ボソッ）」
茅「…うん、わかってる。」ボソッ
烏「クッ、これは最早、暗殺と呼べるのか…？」
だが、殺せんせーを弱点からすると、
渚「…格好つけるとボロが出る」

その瞬間、先生の吊るされていた木の枝が重さに耐えきれなくなり折れた。
一瞬沈黙した後、一気に慌て出した先生に生徒が次々に襲いかかる。
その時に、疑問になっていたことを烏間さんに問いかけた。
渚「そういえば、何故師匠はここに来たんですか？」
烏「ああ、俺も今日からここで教師をする事になった。よろしくな、2人とも。」
渚「これからもよろしくお願いします。…師匠、放課後に話したい事があるんだけど、少しいい？」
烏「？…ああ、いいだろう。それではまた放課後に。」

茅「ナギ、話すの？」
渚「…うん　、師匠だけにはね。」
茅「烏間先生は、絶対気づいてるよね。」
渚「…だよね～。絶対私たちが言うの待ってるよ。だから言う」
茅「わかった。私も一緒にいく。」
渚「…ありがとう」

＊

～放課後～
茅「渚～、いこ。」
渚「うん。」
～職員室前～
今日は丁度殺せんせーが早く帰って行ったため、職員室には烏間先生（師匠）と私たちだけだった。その上、クラスメイトも今日は早めに帰って行ったので、校舎にいるのも私たち3人だけだった。
渚「…単刀直入だけど本題に入るね。…師匠は『ナギ』、『レッド』と

いう2人の殺し屋を知ってるでしょ？」
烏「ああ、渚たちだろう。前々から感づいてはいたが、言うのは気が引けたからな。それに、こう言うことは本人から聞いた方がいいと思ったからな」
渚「…ありがとう。師匠、私とあかりの関係のことと、私が女ってこと、過去のこと、頭が良いってことはクラスメイトには言わないで欲しいんだけどいいかな？私たちが出来る範囲でだったら、仕事とか手伝うからさ。」
烏「いいだろう。それとクラスでは、俺のことを『師匠』と呼ぶのはやめてくれるか？」
渚「…わかった。これで大体はＯＫだね。あかりからは何かある？」
茅「2つだけ。『烏間さん』って呼ぶのと、いつも通り『烏間先生』って呼ぶのとどっちにすれば良いのかな？」
烏「俺は、今日からここで教師をする事になったから、先生でいいんじゃないのか？」
茅「わかった。後もう1つ、また今まで通り稽古をつけてくれませんか？そうじゃないと、体が鈍っちゃうんで。」
烏「ああ、いいだろう。君たちは、教え甲斐があるからな。」
茅「ありがとう、烏間先生。」
烏「それより渚、君はいつまで演技を続ける気なんだ？」
渚「…わからない。多分、人を信じれる様になるまでだと思う。どうせ、私を裏切るんだから、最初から私も信じないし、騙し続ける。そして、裏切られた時に私も皆を裏切る。」
烏「そうか。何かあったら、俺にでも言ってくれ。無理はするなよ。それと俺のことは信じてくれているか？」
渚「…うん。師匠は、家族以外で心を開けれる人のうちの1人だから。」
烏「そうか、よかった。いつでも俺は渚の味方だからな。」
渚「…ありがとう」ニコッ
渚は、本物の笑顔で言った。

烏（か、可愛い。）
烏「ハッ、もうこんな時間だ。送っていくから、少し待っててくれ。」
茅・渚「はーい。」
茅（私、空気だった。ほとんど烏間さんと渚が喋ってるだけで、全然話してない！）
渚「…あかり、早く行こう。」
茅「うん。」
そのあと、烏間さんに家まで送ってもらった。

6話　素行不良生の時間

「「1、2、3、4、…」」

烏「八方向から、ナイフを正しく振れるように！」

昨日から烏間先生が体育の教師になった事で、体育の授業はナイフや銃などの訓練になった。

今は、基礎的なナイフの素振りをしている。僕ら的には、物凄くつまらない。

殺せんせーの授業は、いたって普通の授業だったが、スペックが違いすぎて評判はあまり良くなかった。だが、殺せんせーと烏間先生の会話を聞いていると、殺せんせー的には評判は良かったらしい。

その言葉を聞いていた菅谷くんは、

菅「嘘つけよ、殺せんせー。身体能力が違いすぎるんだよ。」

と、ツッコミを入れた。

その言葉を聞いた杉野が、

杉「体育はやっぱ人間の先生に教わりたいわ…」

と言ったら、殺せんせーの決定打になったのかすごく落ち込んでいた。意外と精神的な所は弱いんだね。

烏「よし、授業を続けるぞ」

前「でもさぁ、烏間先生。こんな訓練意味あるんすか？それに、堂々とターゲットのいる前でさ。」

疑問の声を上げたのは、前原くんだ。まぁ、そりゃそうだろう。堂々とターゲットのいる前で訓練をするなんて、手の内を晒しているようなものだからなぁ。

けど、

渚（勉強も、暗殺も同じ事。基礎を身に付ける程役に立つ。

烏「勉強も、暗殺も同じ事だ。基礎は身に付ける程役立つ。…磯貝君、前原君、前へ」

烏「そのナイフを俺に当ててみろ」

磯「エッ、いいんですか？」

前「二人掛かりで…？」
烏「そのナイフなら俺たち人間に怪我一つつけられない。掠りもすれば、今日の授業は終わりでいい。」
磯貝くんは、真っ先に烏間先生に飛びかかる。
それを烏間先生は、体を反転させて避ける。その次の、前原くんの攻撃も軽く受け流していた。
烏「このように、多少の心得があれば素人２人のナイフは俺でも捌ける。…俺にも当てられないようでは、マッハ２０で動くような怪物に当てられる確率は皆無に等しい。」
確かにそうだ。けれど、あの２人はこのクラスでも運動神経は良い方だ。
その２人が当てられずに、捌かれるほどのものなら、このクラスで殺せんせーにナイフを当てれる生徒はまず居ない。僕らを除いては。
烏「砂場を見ろ！奴は、今の行動の間に砂場に大坂城を作り、着替えて茶まで点てている」
何故そこまでする⁉？
烏「クラス全員が俺に当てられるようになれば、少なくとも暗殺の成功率は格段に上がる。ナイフや狙撃など、暗殺に必要な基礎の数々。体育の時間で、俺から教えさせて貰う。
では、今日の授業はここまで。」
「「ありがとうございました」」
今日の授業を見て、烏間先生（師匠）の人気は高まったようだ。
杉「６時間目、小テストか～」
教室に戻る時に隣にいた杉野が嫌そうな感じで言った。
渚「体育で終わって欲しかったねー」
そう言って前を向くと２年間同じクラスだった、『赤羽業（赤羽カルマ）』が居た。
業「よぉ、渚くん。久しぶり」
カルマ君は、暴力行為を繰り返して停学になっていた。
渚「…カルマ君、帰ってきたんだ。」
僕の言葉に、カルマ君はニッコリと笑った。
私は、カルマ君…いや、赤羽君が嫌いだ。いつも、私の裏を探って

くるから。私に関わらないで欲しいのに。
けど、そんな表情や態度、雰囲気を出さずに、貧弱そうな演技をする。
僕らの後ろの方を見て、楽しそうな、けど驚いたように目を見開き、僕らの間を通っていった。
「へぇ～、あれが噂の殺せんせー？すっげ、ほんとにタコみたいだ。」
笑いながら近寄るカルマ君は、殺せんせーに遅刻をしたことで怒られていた。だが、カルマ君は、適当に謝って、よろしく、と手を差し出した。
殺せんせーもこちらこそ、と言って触手を差し出す。カルマ君の手と、殺せんせーの触手が触れた途端
ブシャッ
殺「っ　⁉？　」
業「あははっ」
驚く殺せんせーの隙を逃さずナイフで襲い掛かる。
そのナイフを避けた先生は、冷や汗を流していた。
業「へぇ？本当に速いし、本当に効くんだこのナイフ」
カルマ君の手には対先生用ナイフを小さく切ったものが貼ってあった。
業「けどさぁ、先生。こんな単純な手に引っかかるとか、しかもそんなとこまで飛び退くなんて、ビビりすぎじゃね？殺せないから、殺せんせーって聞いたんだけど…もしかして先生ちょろい人？」
先生は、イラついたようで、見る見るうちに先生の顔が真っ赤に染まっていった。
いつの間にか隣に来ていた茅野が聞いてくる。
茅「ねぇ、渚。カルマ君ってどんな人なの？」
渚「…1、2年が同じクラスだったんだけど、2年の時に、暴力行為を繰り返したせいで停学になって…。このE組に落とされたんだ。でも、今この場じゃ優等生かもしれない。」
茅「どういう事？」
渚「多分、凶器とか騙しうちなら、カルマ君が群を抜いているはず。」

僕たちを除いては、ね。
そんなことを言っている間、カルマ君は、ナイフを楽しそうに回していた。

7話　素行不良生の時間　part2

～6時間目　小テスト～

プニョン　プニョン……

カルマ君の騙しうちに会いおちこんでいる殺せんせーは、触手で壁パンしている。だが、触手が柔らかすぎて壁にダメージが伝わっていない。

遂に痺れを切らした岡野さんが、

岡「ああ～、もう!!!プニョンプニョン五月蝿いよ!!小テスト中でしょ⁉?」

殺「こ、これは失礼!!」

やっと静かになったと思ったら、次は後ろから寺坂とその取り巻きたちが、喋りだした。

寺「よぉカルマ。大丈夫かぁ?あのバケモン怒らせちまってよ」

吉「どーなっても知らねーぞ」

村「またお家に籠ってた方がいいんじゃなーい?」

挑発するような言い方で言った。それに対して、カルマ君は、

業「殺されそうになったら怒るの当たり前じゃん寺坂ぁ。しくじってちびっちゃった誰かさんの時とは違ってさ」

寺「っ!!ちびってねーよ。テメェ喧嘩うってんのか⁉?」

殺「こら、そこ。テスト中に大きな音を立てない。」

先生が言うか?さっきまでテスト妨害してたん誰だよ!

そんな賑やかな教室を見て良いなぁと思った。前までこんなんじゃ無かったから。…こんなんじゃ無かったって?それじゃぁ、どんなだったの?

そんな事を考えていたら思い出さないようにしていた記憶を思い出した。母親からの暴力、自分以外の学校生徒からのいじめ、暴力……etc

5歳の時

母「もし、男の子だったらこの服が絶対似合うわね。…こっちも捨て難いわ。それより、早く髪の毛切っていいかしら？そうじゃ無いと、この服も、この服も全部似合わなくなっちゃうじゃ無い。」
渚「い、いや。これだけは絶対にいや。やめて、やめて……」
母「何で、親の言う事を聞かないのかしら。男の子だったら良かったのに。女の子なんて要らないわ。」
そう言って、母は、私に暴力を振るった。その数日後に母親に捨てられた。

小３～６の時
生徒１「芸能人だからって、調子乗んなよ。」
生徒２「完璧過ぎて気持ち悪いんだけど」
生徒３「人前でオドオドしてるとか、マジなんなの？芸能界に居て、人見知り？マジ笑える。」
生徒４「
そう言って、暴力を振るわれた。幸い、腕や脚などの見える部分にはやられなかった。そのお陰で、仕事に支障はきたさなかった。
クラス内では無視されて、教科書やノートなどは破られたり、落書きされたり。先生がいなくなった途端、クラス全員で暴力を私に振るう。掃除の時に、いつも机が直されてないのなんて当たり前。
虐められている事は家族や幼馴染にも話さなかった。聞かれたとしても、嘘や演技で受け流した。
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて
いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

息が苦しい。頭が痛い。誰か、たすけて、たすけて、たすけ、て

カエデｓｉｄｅ

寺坂くんとカルマ君が言い合っている。やっぱり賑やかで楽しい方が良いなぁ。そう思っていたら、隣から、

渚「…痛い。や、めて。ごめん、な、さい。…はぁっ…ひゅーっ…ひゅっ…うっ…い、やっ…ひゅっ…かはっ…ひゅっ…‼？はーっはーっ」

茅「渚、大丈夫。ゆっくり息をして。」

渚「ひゅっ…はぁっ…がはっ…ひゅっ…うっ」

茅「…私じゃダメか。先生、烏間先生呼んできて。」

殺「は、はい、わかりました。」

「へ？どうかしたの？」　「な、渚？」

私の声を聞いて皆がこっちを向いた。

殺「茅野さん、烏間先生を呼んできました。」

烏「渚…くん、大丈夫か？」

皆（なんだ？今の間は。）

茅「ありがとうございます。烏間さん、いつもみたいによろしく」

烏「ああ、わかった。」

クラス全員茅野渚以外（大丈夫かな、渚。）

烏「渚、俺の呼吸と合わせろ」

そう言って、通常よりも遅い速度で呼吸をした。それに合わせて、渚も呼吸をする。

やっと渚の呼吸が安定したら、プツンと何かが切れるように意識を飛ばした。

烏「無茶はするなと言ったのにな。それじゃぁ、俺は秋斗さんに電話してくる。」

そう言って、渚の頭を撫でる。

茅「お願い。私は、皆にこの事を説明した後に渚の荷物を持っていくから。」

私は、そう言った後皆に説明した。渚が何故過呼吸を起こしたか、どうしてそれをすぐに対処出来たかなどをね。

茅「渚が何故過呼吸を起こした本当の理由は、私にはわからない。それは、本人から聞いてね。どうしてすぐに対処出来たかは、渚が過呼吸を起こすところを何回も見てるから、かな。けど、まだ私たちの関係は教えられない。秘密の１つは、中間テストで教えてあげる。他に質問があるなら、明日にしてね。」

はぁ~、疲れた。今日の仕事どうしようかな。渚が復活するのは多分無理だから、シュウに手伝ってもらおうかなぁ。それに仕方ないけどこれからは、あの薬も持っておいてもらはないとね。…本当だったら飲ませたくないけど。

ｐｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ　ｐｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ

　ガチャ

学『もしもし』

茅「もしもし、学秀くん。今ちょっと良いかな?」

学『ああ、いいぞ。』

茅「今日の仕事をちょっと手伝ってくれないかな?渚が行けなくなったからさ。」

学『ああ、いいぞ。それじゃあ、ターゲットと場所、時間を後で送ってくれ。』

茅「ＯＫ!そんじゃあ、よろしく。…渚が行けなくなった理由を言いたいから、放課後に家に来れる?」

学『ああ、わかった。今日は特にないからな。じゃあまた放課後に。』

茅「うん、じゃあね。」ピッ

ガラガラ

茅「渚のカバン持ってきたよー。」

烏「ありがとう。それと俺が、渚を家まで送っていく事になった。あかりも乗っていくか?」

茅「うん、お願い。お義父さんはどうだって?」

烏「今日は早めに帰る。それと、今回はナギの代わりにシュウと一

緒にしなさい、と言っていた。あかりも無理はするなよ。」
茅「わかった。ありがとう。」
烏「俺は、渚を連れていくから、荷物を頼めるか？」
茅「わかった。」

その後、烏間先生の車に乗って家まで送ってもらった。
家に帰ってから、渚は目を覚ました。

8話　ハニトラの達人の時間

皆からの質問の嵐が終わったある日

烏「あー、今日から来た、外国語の臨時教師を紹介する。」

イ「イリーナ・イエラヴィッチと申します。皆さんよろしく。」

そういって、イリーナは自己紹介をした。それも、仕事の潜入モードで。

はぁー、これからめんどくさくなるなぁ。そんなことを思いながら、僕とあかりはため息をついた。

その頃周りはというと、

「スッゲー美人」「何故、ベッタベッタなの？」「イラっとする」という声が聞こえた。

烏「本格的な外国語に触れさせたいと学校からの意向だ。英語の半分は、彼女の受け持ちで文句はないな？」

殺「仕方ありませんねぇ。」

ぼくは、この後の反応がどんなものなのか少し気になっていた。超生物の殺せんせーが、女の人にベタベタされた時の独特な反応が。まぁ、相手は、ハニトラの達人さんだけどね。

…普通にデレデレだ。先生には、ハニトラが効くのか？

イ「見れば見るほどすてきですわ。正露丸のようなつぶらな瞳、曖昧な関節。私、虜になってしまいそう。」

先生もバカだなぁ。そこがツボな女なんていないのによく騙されるもんだ。もしかして、先生は、騙されやすい体質か？…それだったら、色々なプランが使える。イリーナ、今回はありがとう。

＊

イ「色々と接近の手段は用意してあったけど、まさか色仕掛けが効くなんて思わなかったわ。」

渚「・・・そうだね、イリーナ。」

イ「わっ!!…ってその声、もしかしてナギさんですか？」

ナギ「・・・そうだよ。久しぶりだね、イリーナ。」
レッド(茅野)「ひさしぶり、イリーナ。」
イ「レッドさんも。お久しぶりです。」
ナギ「・・・あのタコの弱点教えてあげるからちょっと来て。」
そういって、イリーナに弱点を教えた。交換条件を付けてね。
交換条件は、
・私たちの関係をクラスメイトと殺せんせーに絶対に言わないこと。
・私とあかりが殺し屋だって言わないこと。
・クラスメイトがいる前では私のことは『ナギ』、あかりのことは『レッド』って呼ばないこと。
・きちんと教師の仕事もやること。
の4つだ。
イリーナは、交換条件をきちんとのんでくれたので、今の所わかっている弱点を全て教えた。
「もし破った場合はどうなるか分かってるよね?」と脅h…注告しておいた。

＊

イリーナは、早速色仕掛けをしに殺せんせーのところに行った。
何でも本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくて英語を教えている間にかってきて、と上目遣いでお願いしたらしい。
キーンコーンカーンコーン
磯「イリーナ、先生。そろそろ授業始まるし教室戻ります?」
イ「授業…?師匠に頼まれたから仕方なくやってあげるわ。早く教室に戻りなさい。…それと、ファーストネームで呼ぶのやめてくれる?イエラビッチ先生と呼びなさい。」
業「はーい、ビッチ先生。」
イ「略すな!!」

＊

「ビッチ先生、ビッチ先生」
イ「あーもう。ビッチ、ビッチ煩いわよ！まず、正確な発音が違う。日本人は、ｂとｖの区別もつかないの　⁉？　正しいｖの発音を教えてあげるわ！まず、歯で下唇を噛む。それで、発音してみなさい。」
「「ヴィ」」
イ「そうよ。きちんと発音を覚えておきなさい。これが次回までの宿題よ。次の授業の時にテストするから。」
イ「それと、私が教えるのは、外国人に会った時に絶対に役立つ実践的な会話術だけ。受験に必要な勉強なんて、あのタコに教わりなさい。」

殺「ありがとうございます、烏間先生。やはり生徒には、生の外国人と会話をさせてあげたい。世界中を渡り歩いた殺し屋などは、最適ですねー。……イリーナ先生、チャイをもってきました。」
イ「ありがとう。」

キーンコーンカーンコーン
イ「これで授業は、終わりよ。」
「はー、発音のテストかー。誰か、教えてくれ～。」
皆、英語の発音には自信がないようで、誰かに助けを求めている。茅野はもちろん、渚に手伝ってもらうことにしたらしい。
こんな感じでイリーナは、この教室に馴染んでいった。

9話　毒薬の時間

奥「毒です。飲んでください。」
そう言ったのは、奥田さん。こうなったのは、ある日の授業の終わりだった。

＊

これは、『お菓子から着色料を取り出す実験』が終わった後だった。
殺「これで、お菓子から着色料を取り出す実験を終わります。…余ったお菓子は、先生が回収しておきます。」
「「えぇーー」」
片「なんで、地球を破壊する超生物が給料で暮らしてんのよ。」
そんな時、奥田さんが先生の前に行って
奥「あ、あの先生。…あの、毒です。飲んでください。」
と、ストレートに言った。そして、毒を先生の前に突き出した。
そして、その毒を先生は飲んだ。
殺「こ、これは…うん、ニュ」
そしたら、先生の顔にツノが生えた。
殺「この味は、水酸化ナトリウムですね。これは、先生には、効きません。…次に行きましょう。」
そう言って、2本目を飲んだ。
殺「ニュニュ」
そうすると、次は、先生の顔に羽が生えて、無駄に豪華な顔になった。
殺「酢酸タリウムですね。これも先生には、効きません。…次が最後ですね。
そう言って、最後の1本を飲んだ。
殺「ウォー、ウォーー……ポン」
そうしたら、真顔になった。…変化の方向性が読めない。
殺「…これは、王水ですね。どれも、先生の表情を変える程度です。」

ボソッ
殺「先生のことは嫌いでも、暗殺のことは嫌いにならないでください。」
と、急に変なことを言い出した。
殺「それとねぇ、奥田さん。生徒1人で毒を作るのは安全管理上見過ごせません。…この後時間があるのなら、一緒に先生を殺す毒薬を研究してみましょう。」
奥「は、はい」
茅「ターゲットと一緒に作る毒薬ねぇ～。」
渚「明日、成果を聞いてみよう。」

＊

～次の授業～
イ「それじゃあ、フォニックス発音のテストをするわよ。内容は簡単、前に書いてある26個の単語を出席番号順に立って言いなさい。言う場所は、自分の席から。…それじゃあ、カルマから。」
業「ａｐｐｌｅ、ボート、ｃａｔｃｈ、ｄｏｇ……」
イ「まあまあね。ｂの発言がきちんとできてなかったわ。」
・　・　・
イ「次、渚」
渚「ａｐｐｌｅ（りんご）、ｂｏａｔ（ボート）、ｃａｔｃｈ（つかまる）、ｄｏｇ（犬）、ｅｌｅｐｈａｎｔ（象）、ｆｉｓｈ（魚）、ｇｒｅａｔ（偉大な）……」
渚は、全ての単語を完璧な発音で言った。
パチパチパチパチ
「「スゲ～。発音良すぎ。」」
イ「完璧。」

渚「あ、ありがとうございます。」
イ「次、菅谷」
・
・
・
キーンコーンカーンコーンコーン
イ「これで授業は終わりよ。」
「「ありがとうございました。」」
杉「なあ、渚って意外と英語の発音良いんだな。」
渚「そんな事ないよ。」
そう言って誤魔化しておいた。暗殺業で身に付けたなんて言えないからね。
業「ねえ、渚くん。あんな上手な発音いつのまに覚えたの？2年の時までそんな事なかった筈なんだけど？」
いつもコレだ。普通に質問をしているようで僕の事を探るような質問をしてくる。けど僕は、本当の事を答える気は無いので適当に受け流す。
渚「偶にお父さんの知り合いの外国人が家に来るんだ。その時に、その外国人さんに日本語を教える代わりに、英語を教えてもらったんだよ。多分、そのおかげかな？」
嘘と真実を混ぜて言う。
それよりも早く話題変えないと。
渚「それより、もう放課後だから、奥田さんと殺せんせーが毒薬作りをしてるんじゃないのかな？ちょっと覗いていこうよ。」
杉「ああ」業「いいよー」茅「うん」
ガラッ
杉「ああ、やってる。それより、どんな毒薬作ってんだろうな？」
業「殺せんせーを殺せる毒薬ってどんなのだろうねー。」
渚「終わったのかな？それよりも先先生が渡してたあの紙なんなんだろ？」
茅「ねえ、皆。明日、どうなったか聞いてみようよ。どんな毒薬を

作ったとか、あの紙はなんなのかとかさ。」
渚「そうだね。今日はもう帰ろっか。」

～次の日～　キーンコーンカーンコーン
茅「で、先生にそれを持って来いって言われたんだ…」（中身は何なんだろう？）
渚「あの紙は、毒物の正しい保管方法が書いてあったんだ。」
ガラガラッ
殺「はい、皆さん。席についてください。」
奥「殺せんせー、これどうぞ。」
殺「では早速、いただきます。」
殺「ヌルフフフフ・・・
奥田さん、ありがとうございます。
先生は、君のお陰で次のステージに進めそうです。」
茅・渚（（絶対演技してるなぁ。））
奥「それって、どういうことですか？」
殺「ニュヤーーーーーーーー……ふぅ」
「「溶けたーーーーー!?？」」
殺「君には、先生の細胞を活性化させて流動性を増す薬を作ってもらったのです。」
殺「液状故にどんな隙間にも入り込む事が可能になり、スピードはそのままに」
奥「騙したんですか？殺せんせー」
殺「奥田さん、暗殺には人を騙す国語力も必要ですよ。」
殺「今回のように、毒を馬鹿正直に渡しても、ターゲットに利用されるだけですよ。……渚くん。君が先生に毒を盛るなら、どうします

か？」
渚「ぅ～ん…甘い飲み物とかで毒を割るかな。」
殺「そう、上手な毒の盛り方、それに必要なのが国語です。」
殺「君の理科の才能は、将来きっと皆の役に立てれます。それを多くの人に伝えるための国語力も鍛えてくださいね。」
茅・渚）暗殺以前の問題だなぁ。
業「やっぱり皆、暗殺以前の問題だね。」
ムッ、赤羽と考えてる事が被った。なんか嫌。

まだまだ、先生の命に迫れる生徒は出そうに無いなぁ～
早くしないとクラスでの暗殺ができなくなっちゃうよ～。

１０話　全校集会の時間

磯「急げ、遅れたらまたどんな嫌がらせされるかわかんねーぞ。」
岡「前は本校舎の花壇掃除だったっけ？」
前「あれはキツかった。花壇広過ぎるんだよ。」
岡「なんで私たちだけこんな思いしなきゃならないの～～!!!」
今日は、全校集会だ。
なので、僕たちE組は旧校舎から本校舎まで、山下りをしなければならない。フリーランニングで行った方が断然速いと思うが気にしないでおこう。
それも、本校舎の生徒よりも早く整列していないといけないという条件付きでだ。
僕ー潮田渚と茅野カエデは集会に参加したくないのが、本音だ。
その理由は、集会の後に会うある男子生徒に学校では会いたくないから。
そんな事を考えていると、いつの間にか本校舎の校庭に着いていた。途中、岡島くんが災難な目にあっていたが。
勿論、国家機密の殺せんせーは旧校舎に残ってもらって。ヴィッチ先生は、本校舎に着く頃には疲れ果てていた。…一応殺し屋なんだし、もうちょっと体力つけなよ。
磯「何とか間に合ったな。…ほら皆、急いで整列しようぜ」
そう言われて、体育館で整列した。
途中、声を掛けられることもあったが無視した。

月に1度の全校集会でも、僕たちE組の差別待遇は変わらない。
僕らはそれに長々と耐える。
校長「えー、要するに君たちは全国から選りすぐられたエリートです。・・・」
と、長い長い校長のお話は右の耳から左の耳へ通り抜けていった。
…聞こうとしなくても覚えてしまっているけど。
校長のお話の一言で周りが笑い出す。…黙ってよね。小学校で習

わなかったのかな？集会は静かにしろって。
そんなことを思っていると、後ろの菅谷君が
菅「渚、そういえばカルマは？」
と聞いてきた。
渚「サボり。集会ふけて罰食らっても痛くも痒くも無いってさ。」
僕も、サボればよかったかも。学校では、学秀とは会いたくないし。

次は、生徒会からの発表らしい。…はぁー。学秀が出てくる。アイコンタクトで、『待ってろ』とか言われるんだろうなぁ。
おっ、烏間先生が来た。他のクラスの先生たちに挨拶してるよ。やっぱり堅物だな。挨拶されてる先生、微妙に惚れてるし。
そんな時、中村さんと倉橋さんがナイフケースを取り出して見せ合っていた。烏間先生は、『可愛いのはいいが、ここで出すな。他のクラスには秘密なんだぞ！』と言って、注意していた。
その時、ヴィッチ先生も体育館に入って来てE組の方を見ていた男子生徒や他の先生たちはヴィッチ先生に釘付けになった。…やっぱりイリーナは見栄っ張りだな。
そして、僕の方に来て小声で、
イ「・・・他の弱点も教えてください。ナギさん。」ボソッ
と、言って来た。僕は、最初に決めた交換条件を破ったイリーナに教える訳は無く、
渚「・・・何簡単に約束破ってくれてんのかな？殺されたいの？…まあ、約束破ったから弱点は教えないけど。」（黒い笑み）
と言って、イリーナだけに殺気を放った。
イ「ご、ごめんなさい」
渚「その代わり、今度もう1人の仲間を教えてあげる。まだ知らないでしょ？」
イ「ありがとうございます。」
いつの間にか、生徒会の発表準備が終わっていたようで、他のクラスの生徒たちは生徒会行事の紙を持っている。やはり、E組の分は無いようだ。

荒木「今配ったのが生徒会行事の詳細です。」
磯「すいません、E組の分まだなんですが」
荒木「あれー、おかしいな？ごめんなさい。E組の分忘れたみたい。すいませんが、全部記憶して帰ってください。それに、E組の人は、記憶力も鍛えた方がいいと思うし。」
そう上から目線で荒木鉄平は言う。
記憶力を鍛えた方がいい、か。E組でも憶えられるんだったら他のクラスの生徒たちはもっと簡単に憶えられるはずだよね。だったら、「すいませんが、ちょっと見せてくれませんか？3秒でいいから。」と隣のクラスの1人に言う。OKだそうで、3秒だけ見せてもらった。よし、憶えた。
渚「生徒会行事の詳細について・・・」
と言って、プリントの内容を言い始める。内容を全て言い終わる前に荒木くんが
荒木「な、何でそれを知っているんだい？」
壇上にいる荒木くんが驚きながら言う。
渚「えっ、記憶してって言われたから隣の人に3秒だけ見せてもらった時に記憶しただけだけど？文句でもあった？それに、E組の僕でも暗記出来るんだから、当然他のクラスの人も暗記出来るはずだよね？」
そう言うと、周りが一気に静まった。あかり（茅野）と学秀と烏間先生は呆れた顔でこっちを見ていた。
やり過ぎたかな？けど、あかりの事を悪く言ったようなものだから、見過ごせないしね。
そんなことを考えていると、プリントを渡された。手書きのようだ。こんな芸当が出来るのは、殺せんせーだけだ。
殺「磯貝君、問題ないようですね。」
そんなこんながあったが、無事集会は終わった。
生徒会長からの話の時に、学秀にアイコンタクトで『やり過ぎだ。もう少し自重しろ。それと、集会の後、少し待ってろ。』と言われた（？）ので仕方なく体育館前の自動販売機で飲み物を買って待ってい

たら、
高田「おい渚。お前らさ、調子乗り過ぎじゃね？」
田中「集会中に笑ったりとかよ、ちょっとは周りの迷惑考えろ。」
高田「E組はE組らしく、下向いてろよ。」
田中「どうせ、人生詰んでんだからよ。」
はー、やっぱバカだコイツら。人生詰んでんのはお前らの方だってこと気づいてないんだ。
学秀「潮田くん、ちょっといいかな？…この人たちは何をしているのかな？さっきのことで君たちよりも潮田くんの方が頭が良いと言うことがわからなかったのかな？」（威圧）
高・田「「す、すいませんでしたー。」」
学「よし、行ったね。それじゃあ、ちょっといいかな？」
～校舎裏～
渚「・・・何の用、学秀？」
学「それは勿論、A組への勧誘さ。」
またか。
渚「・・・それは勿論断る。」
学「そうか。それじゃあ、今度のテストで本気を出してくれ。」
渚「・・・わかったけど、全力じゃない。それと、あかりは正体バラしてないから本気出さない。」
学「よし、これで渚と張り合える。あかりは、仕方がない。…それじゃあ、今日の放課後勉強会しないか？あかりも誘ってな。」
渚「・・・別にいいよ。あかりには、私から伝えておく。場所とかは、メールで送って。それと、私とは張り合いにならないよ。」
学「ああ、わかった。それじゃあ、また放課後に」
学秀と話した後、旧校舎に戻った。

～理事長室～
ｅｎｄのE組が普通の生徒を返り討ちに（言葉でだが）して歩いていく。だが、それは私の学校では合理的ではない。少し改善する必要がある。だが、普通の生徒を押し退けて歩いて行くのは僕が気に入っ

ている渚さんだ。改善するべきか悩みどころだ。

11話　中間テストの時間

キーンコーンカーン

殺「さて皆さん、始めましょう。

「「いや、何を!!」」

殺「中間テストが迫って来ましたので、高速強化テスト勉強を行います。」

殺「先生の分身が1人ずつマンツーマンでそれぞれの苦手科目を徹底的に復習していきます。」

今までの復習って、全部記憶している僕に必要無いじゃん。今回必要そうな記憶を引っ張りだして書き取りしてよう。先生の言っていることはBGMだとでも思って。

ガヤガヤガヤガヤ　カキカキカキカキ　ぺちゃくちゃぺちゃくちゃ

暇だったので、先生の分身にナイフを突き刺す。丁度、赤羽くんが左頬を僕が右頬を刺したので、両側の頬がいっぺんに歪んでいる。クラス全員がお前もかという目で僕の方を見ている。何でだろう？暇だったから暗殺してるだけなのに。

殺「2人とも、いきなり暗殺しないで下さい。他の分身にまで影響が出ます。」

業「へー、意外と繊細なんだーこの分身。」

渚「いきなりじゃなきゃ暗殺になりません。」

その日の授業、僕は教室があまりにも煩くて集中出来なかったので、教員室に行って勉強をした（ハーバード大学入試レベル）。

ＨＲの後、茅野に今日学秀の家で五英傑の人たちと勉強会をする事を話しながら教室を出ると教員室のドアが開いていたので2人で覗いてみると、そこには、理事長が居た。何やら、殺せんせーと話をしているらしい。

理事長「まあ、余程のことがない限り私は暗殺にはノータッチです。十分な口止め料も頂いていますしね。」

烏「助かってます。」
そう言った烏間先生は苦い顔をしていた。
イ「随分と割り切っておられるのね。嫌いじゃ無いわ、そういう男性。」
理事長は、ビッチ先生の言葉に「光栄です」と一言だけ述べた。
理事長「そうだ、殺せんせー。1秒以内に解いてください」
理事長は今思い出したかのように言い、知恵の輪を殺せんせーに投げた。
殺「えっ、いきなり ⁉？ 」
殺せんせーの触手は、知恵の輪に絡みついていた。知恵の輪でテンパるんだ。意外。
理事長「噂どうりのスピードですね。でもね……世の中には、スピードで解決できない問題も有るんですよ。」
教員室のドアが開けられ、僕らは慌てて傍に隠れた。
理事長「ん？久しぶりだね、潮田くん、茅野さん。」
渚・茅「「お久しぶりです、理事長。」」
僕と茅野はペコリとお辞儀をした。
渚「理事長、ちょっとお願いがあって…」
理事長「何だい？聞くだけ聞いてあげよう。」
少し興味深げな表情で見てくる。
渚「ありがとうございます。単刀直入に言います。ピアノをこの校舎に入れて欲しいんですけど可能ですか？」
理事長「ピアノ、か。いいだろう。そのかわり条件があるよ。それは、君のテストだけ問題の難易度を上げてその上で４９０点以上の点数を取る事だ。範囲は、東京大学入試レベルだ。」
渚「はい、ありがとうございます。」

～テスト前日～
殺「今日は更に頑張って増えてみました。」
その言葉を聞いた途端、僕は教室を飛び出した。

昨日よりも煩くなるとかゴメンだし、教室に居たら理事長との賭けの為の勉強が出来ないからね。殺せんせーがなんか言ってるけど無視しよう。

ガラガラッ

渚「・・・失礼します。」

烏「はー、また来たのか（呆れ）。昨日も言ったが此処はサボり場所じゃ無いんだぞ、渚。」

渚「・・・わかってる。でも、教室煩いから集中出来ない。そうすると、理事長の賭けに勝てない。」

烏「はー。それで、理事長と何を賭けたんだ？」

渚「・・・ピアノ。条件は、東大入試レベルのテストを４９０点以上取ること。」

烏「そうか。確かに、あの煩さじゃ集中出来ないだろうな。仕方ないが、中間テストまでは此処で勉強していいぞ。」

渚「・・・ありがとう。」ニコッ（ダキッ）

烏（なんだ、この可愛い小動物は！）

カチカチカチカチ⇦パソコンの音

カキカキカキカキ⇦何かを書く音

キーンコーンカーンコーン

渚「・・・１回教室戻る。」

ガラッ　ピシャッ

～教室～

渚「茅野～、どうだった？」

茅野は、解らない問題があったようで僕に聞いて来た。

茅「あっ渚、ココ教えて。」

それを、出来るだけ分かりやすく説明する。

渚「これは、ココをこうして解けばいいよ。」

茅「ありがとう。それで、理事長との賭けに勝てる自信はあるの？」

ありまくりで反対に間違えないか心配だなぁ。

渚「勿論。そのために、クラス内でのテスト勉強の時間は教員室で勉強してるんだよ。」

茅「確かに。渚の場合、煩すぎると集中出来ないもんね。」
渚「そうゆう事」
業「渚くん、次の授業（テスト勉強）もサボるの？」
渚「まあ、そんなかんじかな。」
杉「テスト勉強しなくていいのかよ。まあ、渚は大丈夫そうな気がするけどさ。」
渚「きちんとテスト勉強はしてるよ。」
業「それより、さっき聞こえたんだけど、渚くん理事長と何か賭けてるんだって？」
何処でその情報を…って、さっき茅野と話してた内容を聞かれたのかな？
杉「それ、本当か!?」
そこまで驚くような事なのかな？あの人とは、何回も賭けをしてるからわかんないや。
渚「うん。ピアノをね。条件は、東大入試レベルのテストで４９０点以上取る事。」
業「ふーん、それで勝てる自信あんの？」
渚「勿論。ピアノの為なら何でも頑張る。」
キーンコーンカーンコーン
渚「それじゃあね。」
そう言って教室を出て、教員室に行き、勉強を始めた。
ってそれよりなんで僕が頭良いこと軽々と話してんだろ!!????
わたｓ…僕って本当はバカ?!隠して意味ないじゃん。何やってんだろう（呆れ）
僕は悶えながらも勉強した。←意外と器用？
カチカチカチカチ
カキカキカキカキ
キーンコーンカーンコーン
休み時間も僕は教員室で勉強していると片岡さんがイリーナを呼びに来た。
片「イリーナ先生ちょっと来てください。」

イ「ちょっと、何なのよ。渚も勉強してｎ……ヒッ」
僕は、勉強の邪魔をされそうになったので、イリーナに向けて殺気を放った。
渚「片岡さん、何かあったの？」
片「殺せんせーが、暗殺者について説教をするみたいで、全員外に出なさいって言われて、私はイリーナ先生を呼んだ来てって言われたから。」
それじゃあ、僕には関係なさそうだね。
渚「そうなんだ。片岡さん、僕此処で勉強してるから。」
片「いやいや、渚もだよ。」
はー、めんどいなぁ。だが、腕を掴まれて引きずられてるから、行くしかないか。
校庭では、殺せんせーが、
殺「第２の刃を持たざる者は、暗殺者の資格なし。」
そう言って、竜巻を起こして校庭を綺麗にしていた。
『クラス全員５０位以内』を取らなければ、殺せんせーは此処を出て行くらしい。
思うんだけど、それ僕に関係なくない?!だって、皆と問題違うし。それより、僕の場合順位とかどうなるんだろう？

～テスト当日～
僕は、皆とは違う教室でテストをした。試験監督は、去年の僕の担任で今は３―Ｄの担任をして居る先生だ。
全教科スラスラと解いていった。
この学校は、テスト問題と解答用紙を１番最初に渡されるので、１つ目のテストが終わったら次のテストをしてもいい事になっている。
だから僕は、１限（５０分）の間に２教科ずつ解いていき、見直しもする。３限目の半分くらいしたところでテストは終わったので今頃皆が受けているであろう中間テストの問題を解いていた。
簡単すぎ。難しい問題を解いた後に簡単な問題を解くとすごく簡単に見えるみたいな？

数学は、凶悪な問スターが魚に見えてきた。⇦こんな事あるのか？
数学の最後の問題は、余計な部分が多すぎて面倒だったが何とか解いた。
そんなかんじで中間テストが終わった。

１２話　テスト返しの時間

殺「……先生、この学校の仕組みを甘く見過ぎていたようです。君たちに顔向けできません。」
そういった先生に、僕と赤羽くんはナイフを投げる。
赤羽業総合４位で、皆の総合順位も上がっている。僕も本気でやったから、学秀を抜いて堂々と総合１位で全教科１００点。賭けの方も全教科１００点で賭けの条件をクリアした。
業「いいの～？顔向けできなかったら、俺が殺しに来るのも見えないよ。」
渚「そうそう。範囲がちょっと変わっても関係ないし。それに、ピアノがかかってるからね。」
と言い、テストの結果を見せる。
赤羽業
国語：９８　数学：１００　理科：９９　社会：９９　英語：９８　総合４位
潮田渚
国語：１００　数学：１００　理科：１００　社会：１００　英語：１００　総合１位
「渚が浅野を追い越した。」
「数学の最後のあの問題が解けたのか!?」
「渚はどこまで実力隠してたんだよ。」
クラス全員が驚いている。
業「俺の成績に合わせて先生が余計なトコまで教えたからだよ。」
渚「僕の場合は、元々大学の範囲までやってたからね。」
大学の範囲といってもハーバード大学入試レベルなのだが。
それともし、このクラスを出る時があれば、素性がバレた時だけ。
その時は、Ａ組にいくかな？
業「でも、俺はココを出る気ないよ。ココの方があっちよりも絶対楽しいし。」
渚「そーそー、本校舎行っても仲良いのあいつぐらいだしね～。」

(((あいつって誰だよ!)))
業「それでも、殺せんせーは出ていくの?」
渚「それって結局さ」
渚・業「「殺されるのが怖いだけじゃないの?」」
僕と赤羽くんで先生を挑発すると、クラス全員が挑発し始めた。
殺「ニュヤーー!!先生は逃げるのではありません。期末テストであいつらに倍返しです!!」
殺「所で、渚くん。ピアノがかかっているというのはどういう事ですか?」
と聞かれたので、隠していたもう1つのテスト結果を出した。
殺「こ、これは東大入試レベルの問題ではありませんか!!それも、全て満点です!!」
皆は「へっ?!」といった表情でこっちを見てくる。
仕方がないので、理事長との賭けの条件を説明した。
渚「もし、僕が東大入試レベルのテストで490点以上取る事が出来たら、ピアノをここに置いてもらえる事にしたんだ。」
「理事長に直接要求できる図太さがすごいな」
「理事長に一泡吹かせた事にしておきましょう。」

〜その頃本校舎では〜
「浅野くんが1位じゃないだと!!」
「何ですって!!」
「それじゃあ、誰が1位なんだ?」
「E組の潮田渚っていう奴らしいぜ。」
「あー、あの集会の時の奴か」
「「俺(私)がE組に負けただと(ですって)?!
〜浅野学秀side〜
よし。やっと、渚が本気を出してくれた。やはり、渚には勝てなかったか。だが、これで少しは楽しくなりそうだ。それに、これからは一緒に登校する事もできるかもしれない。

この頃、学秀の周りはやけにテンションが高い学秀にちょっと戸惑っていたのだった。

13話　修学旅行迄の時間

学秀side

学「ところで渚、来週の修学旅行どうするんだ？性別偽装して男って事にしているんだろう。」

渚「そうだった～。忘れてたよ、修学旅行の事とか考えてなかったよ。どうしよう」

渚がちょっとキャラ崩壊しても可愛い。というより、修学旅行とかの泊りがけの事も考えとけよ。やっぱり渚は肝心なところで抜けてるな。

学「バラすのはダメなのか？」

渚「・・・ダメ。正体バレる。」

学「それじゃあ、休むか？」

渚「・・・休みたくない」

学「それじゃあ、どうするんだ。」

渚「・・・あかり、助けて。」

あかり「助けてって言われても…。もうバラしちゃおうよ。正体は付けてるからそう簡単にはバレないよ。いざとなったら、私もいるし。」

渚「・・・わかった。いつかはバラす。けど、クラスの人にだけ。」

あかり「わかった。けど、そこまで信頼できるクラスだった？」

渚「・・・わかんない」

あかり「そっか～。信頼できるクラスだといいね！」

そう言ったあかりは、こっちに来て「早くしないと取られちゃうよ。」と言ってきた。それはダメだ。何としても止めなければ。

そんな事を話していたら、もう登校時間になってしまった。別に学年1位と2位が一緒にいてもおかしくはないだろうという事で、一緒に登校した。その所為で、教室に入った途端色々質問された。…喋りすぎて疲れた。

けど、演技してるから多少は大丈夫。

片「渚、来週の修学旅行の班決まった？決まったら、私か磯貝くん

伝えてね。」
皆からの質問が終わった後に、片岡さんがそう言った。
…茅野とは一緒になろう。
渚「茅野、一緒の班になろう。」
そう言うと、茅野は「ＯＫ！」と言った。残り４人。どうするかな。
そう考えていると、殺せんせーが、
殺「まったく、３年生も始まったばかりのこの時期に修学旅行とは、気乗りがしません。」
と舞子姿になりながら言っている。…意外と似合っているのがムカつく。
「ウキウキじゃねーか。」「舞子かよ！」「何故か、似合ってるよ！」
と前原くん、三村くん、岡島くんがツッコむ。
体育の時間烏間先生に、京都の２泊３日の修学旅行でも暗殺だということを知らされた。なので、その為のコースを考えて欲しいとのこと。まあ、適当に頑張りますか。

渚「修学旅行の班か～。…カルマ君、同じ班になんない？」
業「ん～、ＯＫ」
赤羽君なら多分大丈夫だよね。
杉「えー、大丈夫かよ。旅先で喧嘩売って問題になったりしねーよな。」
そこら辺は考えてなかった。
業「へーきへーき。表沙汰にならないように目撃者の口も塞いであるから。」
そう言っているカルマ君から悪魔の尻尾と角が生えている。
へー、僕なら目撃者は殺しちゃうけどなぁ。
杉「おい、アイツ誘うのやめとこうぜ。」
渚「うーん、けど１番気心知れてるし…」
表では、ね。
業「それで～、メンツは？」
渚「僕と茅野と杉野…茅「後、奥田さんも誘った！」…だよ。」

業「６人班だから、後１人女子いるんじゃね？」
本当だったら、女子１人じゃなくて、男子１人なんだけどね。
それを聞いた杉野は
杉「実はこの時の為にだいぶ前から誘っていた…クラスのマドンナ、神崎さんでどうでしょう。」
茅「お～、異議なし。」
マジか。これは、徹底的に演技しないと素性がバレそう。
神「よろしくね、渚君。」
茅「よし、どこを回るか早速決めちゃおう！」
茅野がそう言って回る場所を決めていると、
イ「ふ、ガキね～。世界中を飛び回った私には旅行なんて今更だわ。」
それを聞いた皆は、
前「じゃあ留守番しててよ。」　　岡「花壇に水やっといて～」
と言った後、修学旅行の回る場所を決めていた。そうすると、
イ「何よ、私抜きで楽しそうな話してんじゃないわよ。…」
と逆ギレされた。やっぱり、イリーナはツンデレだ。
そんな事を聞いていると、殺せんせーが教室に入って来た。
殺「１人一冊です。」
と言って、辞書のような修学旅行のしおりを渡された。
お土産人気トップ１００、旅の護身術入門から応用までと要りそうなものと要らなさそうなものがこのしおりには書いてあるらしい。
修学旅行までには読み終われるかな？
３―Ｅは暗殺教室。普通よりも盛り沢山になるであろう修学旅行に僕は、楽しみながらも悩んでいた。
お風呂とか、寝る場所とか色々と、ね。

１４話　修学旅行の１日目

茅「渚～、変装道具一式と着替えと薬、全部持った？」
渚「・・・全部持った。忘れ物無し。」
薬、か。赤羽君の停学が明けた日に丁度発作を起こしてからいつもカバンの中に入れてある、精神安定剤だ。（瞬間記憶能力者だと、忘れることができないからトラウマになりやすい。）…出来るだけ飲まないようにしたい。
茅「それじゃあ、行こっか。」
今日から、二泊三日の修学旅行。…京都か。仕事で行った時ぶりだから行くのは3年ぶりぐらいになるのかな？京都行くの久しぶりだし、いっぱい楽しもう。
菅「うっわ、Ａ組からＤ組までグリーン車だぜ。」
中「ウチらだけ普通車。いつもの感じだね。」
Ｄ先生「入学時に説明したろう、ウチの学校はそういう校則だって。」
モブＡ「えぇ、学費の用途は成績優秀者に優先されます。」
モブＢ「おや、君たちからは貧乏の匂いがするね。」
へー、学費の用途は成績優秀者に優先されるんだ。それじゃあ、
渚「僕よりもバｋ…テストの点数圧倒的に低かったし権限使って退学にしてもいいよね？」
モブＡとＢは血相を変えて電車に駆け込んだ。やっぱりバカだね。
後ろを見ると、茅野がカメラで今の様子を撮っていた。他の皆は冷や汗をかいている。…そんなに怖かったかな？それより、茅野はその動画を誰に送るのかな？
その間に、イリーナは烏間先生に服装を注意されて着替えてた。ｗｗ
新幹線に乗っている間は、殺せんせーが窓に張り付いていたり、皆の意外な一面が見られたりと色々あったとあかりに教えてもらった。何故僕が知らないのは、僕はあかりの肩にもたれながら寝ていたからだよ。

～京都～
Ａ組～Ｄ組は高級ホテル、僕たちＥ組は古い旅館と此処でもクラス差別があった。
殺せんせーは、新幹線とバスで酔ってグロッキーになっていた。岡野さん達は心配しながらも、対先生用ナイフを殺せんせーに向けていた。
その頃僕は、お風呂とか寝る場所とかどうしようと頭をフル回転させて（周りに気づかれないように）、仮病で誤魔化すことにした。
体調不良の演技なんて余裕だからね！元天才子役舐めんな！
いつ決行するとかは、茅野と一緒に決めよう。
～京都見物～
杉「渚、暗殺の場所此処ならいけそうだな」
渚「スナイパーの人から見えるかな？」
そうやって、表面上を取り繕う。こんな見えやすいところでスナイパーから見えないわけ無いじゃん。けど、いい場所かもしれない。下は川が流れてるしね！
茅「変な修学旅行になったね～」
そう茅野が言う。確かに普通ならこんな事考えて修学旅行なんてしないもんね。
渚「確かにね。けど楽しいよ。」
茅「折角京都に来たんだから抹茶わらび餅とか食べたい！」
ほんと、茅野は甘い物に目がないなぁ。そう思っていたら、奥田さんがビックリ発言をした。
奥「それに毒を入れるのは如何でしょう？殺せんせー、甘い物に目がないですから。」
それを聞いたカルマくんが
業「いいね、名物で毒殺」
それを聞いた茅野は、
茅「勿体ないよ、抹茶わらびが」
と言う。毒殺か、今度殺せんせーに効く毒を探してみようっと。
杉「修学旅行の日くらい、暗殺の事忘れたかったよな。いい景色

じゃん。暗殺とは縁のない場所でさ。」
そうでもない。京都はずっと国の中心だったから、暗殺の聖地でもある。
渚「そうでもないよ。・・・」
と説明しながら歩いた。
奥「次は、八坂神社ですね。」
それを聞いたカルマ君は、
業「えぇ～、もーいいから休もう。京都の甘ったるいコーヒー飲みたい。」
茅「飲もう飲もう！」
僕もカルマ君の意見に同情するけど、甘ったるいコーヒーは飲みたくない。
この後、カルマ君と茅野たちに便乗した奥田さんや神崎さんに連れていかれ甘ったるいコーヒーを飲まされそうになったり、高校生に誘拐されそうになったり、と色々あったが無事（？）1日目の京都見物が終わった。